「17年目の秘密」

第4話「守りたい人」

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

谷島春樹（17）　中央高校全日制二年生
夏希（20）　姉、キャバ嬢

高崎倫子（17）　専業主婦
優一（26）　夫、レストラン店員
洋子（56）　姑、専業主婦

山岸利枝子（17）　中央高校全日制二年生
友子（45）　母、スナックのママ
あやめ（15）　妹、中学三年生

宮田真由子（17）　未婚の母
真実（0）　娘、赤ん坊

藤原亮（17）　中央高校全日制二年生
宣彦（48）　父、会計事務所所長
佐和（46）　母、会計事務所副所長
深雪（15）　妹、中学三年生

川村浩輔（17）　中央高校定時制二年生
謙輔（25）　兄、会社員

永井聡実（17）　滝雀学園高校二年生

同級生亜沙美（17）　中央高校全日制二年生
〃　剛士（17）　中央高校全日制二年生
〃　奈々（17）　中央高校全日制二年生

同級生紗耶香（17）　滝雀学園高校二年生

1　アパート・全景

2　同・谷島家・居間

春樹が、タオルで倫子の濡れた髪を拭いている――無表情の顔の倫子。

春樹「優一さんと、何があったの？」

倫子「……」

春樹「話したくないんだったら、無理に話すことはないけど、あんなに夫婦仲が良かったのに、泣きながら別れるだなんて言われたら、俺だって困るよ……。和哉と聡実が付き合い始めて、やっとめでたいなと思ってたのに、急にこんなことになるんだから……」

と、春樹の手にふれる倫子。

倫子「……」

春樹「やっぱ、何かあったんだね……」

倫子「……」

春樹「温かいお茶でも入れるよ。安いパックのお茶だけどさ。（と笑うと）話したくな

ったときに話せば良いよ。何も今無理に話す必要なんてないんだから」

と、台所に行き、お茶の支度をする。

春樹「夫婦って、いろんな障がいがあって、別れる別れないって衝突することもあるかもしれないけど、心から好きな人になったんだもん、そうそう別れることはないでしょ。ゆっくり時間をかけて、仲直りすればそれで良いことなんだから」

倫子、春樹に背を向ける。

春樹、気配に気づき、振り返ると、

春樹「まだ泣き足りないの？　だったら、思いっきり泣けば良いよ」

と、再び支度をする。

倫子、服を脱ぎ始める。

春樹、気づかず、急須のお湯を注ぎ、湯呑みにお茶を注ぐ。

インナーも脱ぐ倫子。

春樹、盆に湯呑を置き、

春樹「できたよ」

と、振り返ると、呆然となって立ち尽くす。

春樹「倫子……」

と、下着姿になった倫子の背中を見つめる――痣だらけになっている。

春樹、思わず倫子に駆け寄り、

春樹「倫子……これ……」

倫子、すすり泣きをし始める。

春樹「倫子……」

倫子「（号泣して）春樹ッ……（と春樹に抱きつく）」

春樹「……」

倫子「ずっと……春樹に助けに来てほしかった……」

春樹「！」

倫子「ずっと……ずっと……」

春樹「倫子……じゃあ……」

倫子「ずっと前からだったんだよ」

春樹「ごめん……何にも気づいてあげられなくて……（と抱きしめる）」

倫子「……」

春樹「少しでも、異変に気づいてたら、こんなことにはならなかったのかもしれないよね……」

倫子「……」

春樹「痛かったでしょ、湿布貼ってあげるから」

と、立ち上がろうとするが、倫子が手を強く握ったまま、離さない。

春樹「……」

倫子、春樹の手を、自分の痣のところに乗せる。

春樹「……」

倫子「摩って」

春樹「……」

倫子「湿布なんてあとで良いの。今はとにかく、春樹にこの痣を癒してもらいたいの」

倫子は、寂しそうな顔で春樹を見つめている。

春樹、返す言葉もなく、ただひたすら

に倫子を見つめる。

3　同場所（時間経過）

箪笥から敷布団を取り出し、支度をする春樹。

お茶をすすりながら話している倫子。

倫子「最初は、理解のある物凄く良い人だったんだよ。私だって、そんな優一の人柄が良いと思ったし、一家心中の生き残りだってことも承知してくれてた。それでも、優一は私のことが好きだって言ってくれて、こんなに若いけど、結婚しようって決めたの」

春樹「……」

倫子「だけど、ちょうど半年前だったかな。お店の店長が人事替えで新しい人が入ってきたの。私がいたときにいた店長は、私たちにすごい理解のある人で、私も優一も信頼してたの。けど、その新しい店長っていうのが、自分勝手な性格らしくて、他の

店員とうまくいってないらしいの。それに……」

春樹「……？」

倫子「病院に行ったら、私、卵巣に問題があるみたいで、子どもができない身体だったの。それが分かった途端、私を〝欠陥品〟って呼ぶようになって……」

春樹「〝欠陥品〟って、優一さん、そんなこと言ったの……!?」

　　頷く倫子。

春樹「酷すぎる……。それだって、言葉の暴力だよ……。よく黙ってたね……」

倫子「せっかく結婚したのに、子どもができなかったのはショックだと思う。でもだからって、仕事でのイライラを私に当たることはないと思うの……」

春樹「そうだよね……」

倫子「それに今度という今度は、もう耐えられなかった……」

春樹「出てきたのは、暴力に耐えかねたから

じゃないの？」

倫子「それもあるけど……アルバイトの女の子と浮気したの……」

春樹「浮気ッ……!?」

倫子「優一、その女と一緒になりたいんだって。だから、別れてくれって……」

春樹「（絶句して）そんなバカな……。勝手すぎるよ、あの男……。絶対に許さないッ」

倫子「春樹……」

春樹「あんな男なんて、すぐに別れちゃいな。そのほうが、倫子だってスッキリするだろうし、あの男にも好都合でしょ」

倫子「そうだよね……。離婚するつもりで、家出てきたんだから」

春樹「よし、こうなったら裁判でも何でも、弁護士立てて相談してやろう。あの男から、有り余るほどの慰謝料もらうつもりにならなきゃッ」

難しい顔の倫子である。

4　滝雀学園高校・昇降口（翌朝）

聡実が登校する――紗耶香の姿を見つける。

聡実「紗耶香、おはようッ」

紗耶香、一瞬聡実を見るが、無視をして、先を行こうとする。

聡実「待ってよ、紗耶香」

紗耶香「（突然に）気安く名前で呼ばないでよ」

聡実「紗耶香……？」

紗耶香「和哉と楽しい思いしてるでしょ」

聡実「……」

紗耶香「聡実。私の気持ち分かってたよね。和哉に片想いしてるって」

聡実「えッ……」

紗耶香「とぼけないでよ。内心では、知ってたくせに。それなのに、和哉に告白して、和哉と付き合い始めるなんて、よくもそんなひどいこと……」

聡実「どうしちゃったの、急に……」

紗耶香「私、あんただけは許さないから」
と、行こうとする。
聡実「紗耶香ッ（と呼び止める）」
紗耶香、足を止めて、振り返ると、
紗耶香「あんたなんか大っ嫌い」
聡実「……」
紗耶香「もう、絶交よッ。友達でも何でもないんだから」
聡実「ちょっと……紗耶香、待ってよ」
紗耶香「和哉と付き合って、幸せになったでしょッ。私が和哉のことを好きだってこと、知ってたくせに……」
聡美「紗耶香が、和哉君を……」
紗耶香「とぼけないでよッ……」
と、憤然と去っていく。
呆然と、紗耶香の後ろ姿を見る聡実。

タイトル
『第４話　守りたい人』

5　中央高校・中庭（夕）

利枝子と亮が、自動販売機のジュースを飲んでいる――一緒にいる春樹。

利枝子「やっぱり、私の言ったとおりだったでしょ。聡実と和哉のこと」

亮「でも、まさか倫子のほうでは、そんなことになってたなんて、驚いたよ」

春樹「俺だって知らなかったよ。まさか、DV受けてるなんて……。それに、気づいてあげられなかったのが、本当に申し訳なくて……」

利枝子「春樹が悪いんじゃないよ。悪いのは倫子の旦那のほうなんだから」

亮「変に気にすることはねえよ。春樹は、これからの倫子を支えていけば良いんだから」

春樹「まあ、それはそうなんだけどね……」

と、春樹の携帯電話が鳴る。

春樹「（携帯を見て）倫子からだ。（と電話に出て）もしもし、どうした？　え、今から？

もちろん、行くよ。俺だって、あの男には言いたいことがたくさんあるんだから。はい、じゃあね（と電話を切る）」

利枝子「倫子、何だって？」

春樹「これから、旦那と話すんだって。だから、倫子たちのマンション、今から行ってくる」

亮「一人で大丈夫か？　手荒な真似でもされたら」

春樹「そうなったら、こっちの勝ちだよ。もし殴られたら、警察に行けば良いんだから。捕まえてほしいぐらいだよ、警察に。あんな男、どうにでもなれば良いんだから」

不機嫌な顔の春樹である。

6　マンション・高崎家・ダイニング

難しい顔をしている倫子。

その隣で、冷ややかな顔で優一を見ている春樹。

対面するように、優一と優一の母・洋

子（56）が座っている。

洋子「倫子さん。あなたは、どのようにお考えなの」

倫子「私は、離婚するつもりです」

洋子「（優一に）あなたは、どうなの？」

優一「倫子がその気なら、俺だって」

春樹「（皮肉に）腹の中では、離婚する気持ちになってくれてホッとしてるんでしょ、優一さん」

優一「……」

洋子「（春樹に）あなた、何てことを言うの」

春樹「お母様。あなたの息子さんが、倫子にどのような仕打ちをしたのか、知らないわけがありませんよね。（と優一を見ながら）まあ、息子さんがどのようにお母様に告げたかは知りませんけど」

洋子「私は、息子から他に好きな人ができたから、倫子と別れたいと聞きましたけど」

春樹「それだけですか？」

洋子「ええ」

春樹「そうですか……。（と倫子に）お母様に見せてあげな。倫子がこれまで、どんな苦労をしてきたか」

倫子「……」

春樹「倫子」

倫子、服をめくり、体中にできた痣を、洋子に見せる。

優一「……」

洋子「この痣が、どうかなさったの？　……まさか、うちの息子が」

春樹「さすが、自分の子どもがどんなことをしたか、見当がついているようですね。倫子は、こんな痛い思いしてたんですよ。子どもができない身体だからって〝欠陥品〟と呼ばれたり、仕事のイライラを、倫子にぶつけて、こんな酷いことしたんですよ。それなのに、離婚してごみのように倫子を捨てて、新しい女とくっつこうとしてるんです。このことについて、どうお考えですか？」

洋子「息子夫婦の事情はよく分かりました。
ただ、原因が息子だけにあるようなその発
言は、聞き捨てなりませんけどね」
春樹「……？」
洋子「息子が、他の女を好きになったのは、
倫子さんが妻として、不足な点があったか
らなんじゃないんですか。子どもができな
いことだってそうですよ。息子一人のせい
にされたら、私だってたまりませんよ」
春樹「不足な点がもし仮にあったとしましょ
う。でもだからって、妻に手を挙げたり、
暴言を吐くことが許されるんですか？」
洋子「……」
春樹「人間誰しも情緒があると思いましたが、
優一さんには、どうやらそれがないようで
すね」
洋子「何を言うんです。私は、主人と別れて
から、女手一つでこの子を育てたんです。
私の教育方法が悪いとでも？」
春樹「何もそこまで言ってませんよ。親には

それぞれ、自分の教育方法があると思いますから。ただ、優一さんの言動に関しては、それ以前、人間性の問題、倫理観の問題だと思います。離婚を切り出されてもしょうがないし、優一さんにとっては、そっちのほうが好都合でしょ」

優一「そうかもしれないな」

咄嗟に優一を見る春樹と洋子。

倫子「優一……」

優一「俺だって、この結婚失敗したと思ってる」

倫子「……」

春樹「本人がこう言ってるんです。早めに離婚しましょ。僕だって、あんたたちバカ親子といつまでも関わり合いなんて、持ちたくありませんから」

洋子「そうですね。じゃあ、離婚しましょ」

春樹「慰謝料は、どうするつもりですか？」

洋子「慰謝料？」

春樹「当然でしょ。そちらの息子さんは、倫

子に暴力をふるって、暴言を吐いて、挙句浮気もしたんですよ。いただくものは、いただきますからね」

倫子「良いの、春樹……」

春樹「倫子……？」

倫子「ご迷惑おかけしました。離婚届は、なるべく早めに用意します。それと、慰謝料は一円たりともらうつもりはありません」

春樹「倫子……」

倫子「短い間でしたが、お世話になりました。いつでも、離婚届にサインしますから」

優一「そうか。じゃあ、早いうちに荷物をまとめて、出てってくれよ。ここは、俺のマンションなんだから」

洋子「そうね。ここは、優一の名義のマンションですもの」

倫子「……」

春樹「（優一たちを睨みながら）倫子、ここまで言われて悔しくないのッ……」

倫子「良いの。私、後悔してないから」
春樹「そう……」
優一「（大きなため息をつくと）やっと離婚できるよ」
洋子「面倒なことにならなくて良かったわね」
拳を握って、優一と洋子を睨んでいる春樹。

7　アパート・谷島家・玄関（夜）
不機嫌そうな顔をした春樹が、倫子と共に帰宅する――聡実が立っている。
春樹「聡実？」
聡実「あ……」
春樹「どうしたの？」
聡実「倫子のことが、気になって」
倫子「ありがとう……」

8　同・同・居間
春樹、倫子、聡実が話している。
聡実「そっか。倫子のところ、そんなことに

なってたんだ」
春樹「（イライラして）今思い出すだけでも
腹立つよ。あのバカ親子」
聡実「珍しいね。春樹がそんなに口悪くなる
なんて」
春樹「悪くもなるよ。謝罪の言葉一つなくて、
潔く離婚しようって話になったんだから」
聡実「何て言ったの？」
春樹「やっと離婚できるとか、面倒なことに
ならなくて良かったとか」
聡実「（倫子に）本当なの？」
倫子「うん……」
春樹「イラッとなるどころか、殺意抱いたわ。
倫子が可哀想で……。法律無かったら、あ
の親子刺し殺してるよ、俺」
聡実「本当……。可哀想……。私も聞いてる
だけでイライラしてきた」
倫子「……」
春樹「せっかく、家族になれたっていうのに
……心から愛した旦那に裏切られた倫子

が不憫でね……」

聡実「裏切りね……」

×　×　×

〈フラッシュ〉

滝雀学園高校の昇降口。

紗耶香「あんたなんか大っ嫌い」

×　×　×

聡実「大事な関係が崩れると、辛いよね……」

春樹「聡実にも、そういう経験あるの？」

聡実「（苦笑して）今日、友達の縁切られちゃった」

春樹「……」

聡実「私の友達、和哉君のことが好きだったみたいなの。でも、そのことに気付かなかった私が、和哉君に告白しちゃったからさ……。だから、もう友達なんかじゃないって言われて……。謝っても許してくれるどころか、私と目も合わせてくれなかった……」

倫子「聡実は、和哉と付き合い始めたこと後

悔してるの？」

聡実「後悔はしてないよ。ただ、告白さえしなければ、友達の縁を切られることなんてなかったって思うとさ……」

春樹「（深刻そうに）そっか……」

少し寂しそうな顔の聡実である。

9　工場・作業場

浩輔が、他の社員たちと共に働いている。

と、事務員がやってくる。

事務員「川村君。さっき、お兄さんから電話があった。（とメモを渡して）昼休みのとき、ここに来てほしいって」

浩輔「分かりました。ありがとうございます」

10　ラーメン屋

浩輔と謙輔が、昼食を食べている。

謙輔「おふくろの病院のこと、考えたのか？」

浩輔「友人のお父さんが、大学病院の先生や

ってるんだけど、一応相談はした。アルコール依存症が治せるような専門の病院があったら、ぜひ紹介してほしいって」

謙輔「もう、そこまで話進めてたのか」

浩輔「当たり前だろ。コップが割れる音を聞くだけで、一気に疲れるんだよ。ちゃんと治療しないと、いつまた、失敗作って言われるか……」

謙輔「浩輔……」

浩輔「父さんにも、よく言っといてくれよ。父さんだって、入院はさせたほうが良いって思ってるはずだ」

謙輔「それなんだけどな……」

浩輔「……？」

謙輔「親父、最初はおふくろを入院させることに賛成してたんだよ。でも、やっぱり家で家族が協力して治療をするのが良いんじゃないかって言い出して……」

浩輔「そんなこと言ったのか？」

謙輔「ああ。仕事して、定時制行って、帰っ

てくるのはいつも遅いだろ。だから、ゆっくり話す暇がなかったけど、そういうことになってるんだ。だからお前も、おふくろのためには、何をするのが一番良いのか、もう一度よく考えてほしいんだ」

黙ってしまう浩輔。

11　マンション・高崎家・リビング

倫子が入ってくる。

優一、見向きもしないまま、テレビを見ている。

優一「（倫子を見ず）やっと来たか。早く荷物まとめて、出てってくれよ。あと離婚届も用意してくれよ」

倫子「……」

12　中央高校・新聞部室

春樹が、呆然と座っている。

春樹「……」

13　アパート・谷島家・居間（回想）

春樹、倫子、夏希が話している。

夏希「え？　倫子ちゃん、結婚するの？」

倫子「（嬉しそうに）うん」

夏希「やっと、倫子ちゃんにも家族ができるんだ。（と春樹に）良かったね、春樹」

春樹「（複雑な顔で）うん……。けど、結婚は早すぎやしないかな。何も、せっかく入った高校を辞めてまで、結婚しなくても……」

倫子「その人、私の家族のこともよく分かってるの。それでも、私のことを好きになってくれて……。もしかしたら、二度とないチャンスになるかもしれないの」

春樹「……」

倫子「私の、たった一人の家族になる人だから」

夏希「倫子ちゃんにとって、この結婚は、未来を賭けた大事な結婚なんだもんね。（と春樹に）心から、思いっきり祝福してあげ

ようよ」

春樹「うん。（と倫子に）でも倫子、これだけは忘れないでよ」

倫子「何？」

春樹「結婚して、家族ができたとしても、俺たちだって、同じ養護施設で育って寝食を共にした、倫子の大事な家族だってこと、忘れないでよ」

倫子「うん（と笑顔でうなずく）」

14　中央高校・新聞部室（回想戻り）

春樹、何かを感じて、ハッと立ち上がる。

15　同・廊下

春樹が荷物を持って、夢中で走っている。

通りかかった松野。

松野「春樹、ちょっと良いか……」

松野の声にも気づかず、走り去ってい

く春樹。

松野「おい、春樹？」

と、利枝子と亮が階段を下りてくる。

利枝子「先生、今春樹って言いました？」

松野「ああ、ちょっと文化祭のことで相談しようと思ったんだけど、何があったのか、夢中で走り出しちゃって」

亮「え？」

松野「何か急用でもできたのかな」

亮「（利枝子に）追うぞ」

利枝子「うん」

と、二人で走り去っていく。

松野「おいッ」

唖然としている松野。

16　アパート・谷島家・玄関

春樹が勢いよく帰宅し、ドアを開けて入る――後を追いかけてきた利枝子と亮が、慌てて止めている。

亮「お前、本気か？」

春樹「（振り返って）当たり前でしょ」
利枝子「春樹、一旦落着きなって。倫子を守りたい気持ちは分かるけど、せっかくスッキリ離婚できるときに、また余計なことしたら」
春樹「離婚したら、そりゃ倫子だってスッキリすると思う。でも、倫子が深い傷を負ってるのに、あの男が一人、幸せになろうなんてそんなことさせないッ……。最後に、あの男に何か仕返しの一つでもしないと、俺の気が済まない……」
亮「今日のお前、変だぞ……。いつもだったら冷静にものを見る春樹が……」
春樹「俺は、いつも通りだよッ……」
亮「春樹ッ」
　春樹、亮をはらい、
春樹「どいてッ」
　と、ドアを開ける。
　荷物を詰めた大きいバッグを持った倫子が、うつむくように立っている。

春樹「倫子……」

倫子、バッグを置き、泣きながら春樹に抱きつく。

倫子「春樹……」

春樹「……」

利枝子「……」

亮「……」

倫子「私……ここ以外、行くところがないの……」

春樹「ずっと、ここにいたら良いよ」

倫子「……」

春樹「お帰り、倫子」

更に涙を流しながら、強く春樹を抱きしめる倫子。

ホッとしたようにお互いの顔を見て微笑む利枝子と亮。

安堵の笑みを浮かべつつ、涙目になっている春樹。

17　道

利枝子と亮が歩いている。

利枝子「一時はどうなるかと思ったけど、あのタイミングで倫子が来て良かったね」

亮「ああ。春樹乱心かって思うほど、今日の春樹は、まるで別人のようだったけど、春樹にとっても、倫子にとっても、二人で一緒にいるのが、きっと一番幸せなんだよな」

利枝子「すごいよね。血もつながってない赤の他人が、家族になれるんだもん」

亮「親兄弟がいる俺たちより、はるかに本当の家族に見えるよな」

利枝子「これから、春樹と一緒に、倫子のこと支えてあげよう。春樹には負けるかもしれないけど、私たちにとっても倫子は大切な友達だもん」

亮「ああ」

利枝子「じゃあ、私ここで。じゃあね、また明日」

亮「おう」

と、手を振りあい、お互い去っていく。

18　アパート・谷島家・居間（翌朝）

倫子が朝食を作っている。

寝ている春樹、物音に気付いて目を覚まして、時計を見る。

春樹「（飛び起きて）あッ、寝坊した」

倫子「（振り返って）えッ、今日学校あるの？土曜日だよ」

春樹、制服に着替えながら、

春樹「部活があるの。朝から、原稿チェックと次の連載企画考えようと思ってたんだよ」

倫子「ごめん。じゃあ、朝ごはんいらない」

春樹「（支度をする手を止めると）あ……別に今日は、急がなくても良いか。部活って言っても、一人で作業するだけだし」

倫子「そうなの？」

春樹「うん。ゆっくり朝ごはん食べてから、出かける」

倫子「じゃあ、先に食べてて。今、お弁当の

支度するから」

春樹「いいよ、そこまでしなくても。一食抜いたぐらい、大したことないだから」

倫子「これからお世話になるんだもん、それぐらい」

春樹「お世話になるなんて言い方やめてよ。ずっとここにいるつもりなら、そんな気遣いいらないよ」

倫子「（笑って）私がやりたいの」

春樹「倫子……」

19　同・同・玄関

靴を履いている春樹――見送りに来る倫子。

倫子「いってらっしゃい」

春樹「（笑顔で）いってきます」

と、出ていく。

笑顔で見送る倫子。

20　道

買い物袋をぶら下げた利枝子が歩いている。

21　宮田家・居間

真由子に案内されて、利枝子が入ってくる。

真由子「ちょうど今から昼ごはん食べようと思ってたの。真実もちょうど寝てくれてるし、一回起きちゃうと、なかなか時間ないから」

利枝子「じゃあ、グッドタイミングだったね。（と台所に行き）ゆっくりしてなよ、私が作ってあげるから」

真由子「嬉しいなぁ。何作ってくれるの？」

利枝子「（笑って）真由子の大好きなもの」

真由子「何？」

利枝子「オムライス」

真由子「久しぶりだなぁ、オムライスなんて。食べたいと思っても、なかなか作ろうっていう気にはなれないし、どこかに食べに出

かける暇なんてなかったから」
と、真由子の携帯電話が鳴る――うんざりしたような顔をする。
真由子「ちょっとごめんね」
と、携帯電話を持って廊下に出ていく。
支度を始める利枝子――真由子の怒鳴り声が聞こえる。
真由子の声「もう電話してこないでって言ったでしょ」
利枝子「（怪訝に）……」
真由子の声「私たちはもう別れたんだよ。今更会って、何を話せって言うの。私、会うつもりないから」
利枝子「……」
と、真由子が戻ってくる。
利枝子「（やや小さい声で）真実ちゃんが眠ってるんだから、もっと静かにしないと」
真由子「ごめん、つい力が入っちゃって……」
利枝子「電話の声、こっちまで聞こえてきたからさりげなく聞こえたけど、もしかして

別れた彼氏？」

真由子「うん……。一度会って、話がしたいんだって」

利枝子「そっか……」

真由子「今更、あんな男と会って何になるって言うの。私が真実を妊娠した時、奥さんにバレるのが怖くて、別れたんだよ。あの時、私がどんなに苦しんだか、あの男には分からないんだよ。女手一つで子どもを育てることがどんなに大変か……」

利枝子「春樹と縁が切れたり、一人で真実ちゃんを出産したり、真実ちゃんを生むまでに、真由子がどんなに寂しい思いしてたか……。私だって何度も見舞いにきたから、真由子の気持ちよく分かる」

真由子「そうでしょ」

利枝子「でも、一回会ってみるのも良いんじゃないの？　はっきりと話にケリつけるためにも」

真由子「話すことなんてないの。あいつは、

奥さんがいながら私と付き合って、子どもが出来たと分かったら、自分の家庭も壊れるかもしれないからって、私を捨てたの。犠牲を最小限に抑えたかったんだよ」

利枝子「だからって、何も真由子がその最小限の犠牲にならなくったって。私、納得いかない」

真由子「私は、もう納得してるの。別れたことで、もう縁切れて、二度と会うこともないだろうって気持ちで、一人で真実を生んで、育てようとって決めたの。だから、私後悔なんてしてないの」

利枝子「真由子……」

真由子「（笑顔になって）ね、早く作ってよ。私、お腹空いちゃったから」

と、テーブルの雑誌を読み始める。

利枝子「はいはい」

と、再び支度を始める――不安そうな顔で、真由子を見つめる。

22　スナック〝友子〟・店内（夜）

汚れた食器を洗っているあやめ。

友子が客と一緒に酒を飲み、盛り上がっている。

友子「あやめ、ビールないよ。持ってきて」

あやめ「はい」

と、ビール瓶を客のもとへ運ぶと、再び食器洗いを始める。

23　同・裏口

利枝子が帰宅する。

店内から、友子と客の楽しそうな笑い声が聞こえてくる――恨めしそうな利枝子の顔。

と、あやめがゴミを捨てに出てくる。

あやめ「あ、お帰り。お姉ちゃん」

利枝子「あんた、店手伝ってるの」

あやめ「お姉ちゃんがいないんなら、代わりに手伝ってくれって」

利枝子「手伝うことなんてないの。ほっとけば良いんだから」
あやめ「でも……」
と、友子の声が聞こえる。
友子の声「あやめ。何してるの、早く持ってきて」
あやめ「（店内に向かって）はい、すぐ行きます。（と利枝子に）お姉ちゃん帰ってきたんだったら変わってよ。私も疲れたんだから」
利枝子「私はこんな店手伝う気なんてないの。あんたが勝手に手伝い始めたんでしょ。最後までやんなさいよ」
と、そそくさと中へ入っていく。
大きく溜息をつくあやめ。

24　藤原会計事務所・事務室

亮が帰宅する。
宣彦が深刻な顔をして電話で話している――佐和も隣で付き添っている。

宣彦「（電話に）そうですか……。はい、分かりました。では、また次の機会に。失礼します」

と、電話を切る。

佐和「断られたの？」

宣彦「会社で決めた公認会計事務所に委ねるだとよ。ちっぽけな会計事務所なんて、当てにはしてないんだよ。ああいう大企業っていうのは」

亮「もういい加減やめたら良いのに」

ジロリと亮を見る宣彦と佐和。

宣彦「何だと？」

亮「断られたんだろ、仕事。そろそろこの事務所閉めて、どこか別の大きな会計事務所で働けば良いんだよ。そうしないと、今に俺たち飢え死にだぞ」

宣彦、荒々しく亮の前まで来ると、頬をたたく。

佐和「あなた……」

宣彦「お前、よくそんな大きな口が叩けるな。

俺たちの気持ちも知らないで……。父さんだって母さんだって、どんなに小さな仕事だって必死にやってるんだぞ。どうして分からないんだよ。お前たちのためなんだぞ」

亮「よく言うよ。何が俺たちのためだよ。自分の跡を継いでほしいからって、都合のいいこと言ってるだけじゃねえか。こんな先も見えない会計事務所継ぐなんて、深雪も可哀想だよな」

拳で亮の顔を殴る宣彦。

その場に倒れる亮。

と、階段を降りる音が聞こえ、深雪がやってくる――何が起きているのか分からず、混乱している。

佐和、宣彦を止めて、

佐和「もうやめよう。（と亮に）亮、お父さんに謝りなさいッ」

亮「どうして俺が謝らなきゃいけないんだよ。謝るんだったら、二人が深雪に謝れよ。好きなこともできないで、こんな会計事務所

継がされるんだからよ」

深雪「……」

佐和「亮。あんた、深雪に嫉妬してるんでしょ。自分が高校受験失敗して、今は深雪に期待の目が向けられているのが気に入らないだけでしょ」

亮「別に俺は、高校受験失敗して良かったと思ってるんだよ。失敗してなかったら、今みたいに呑気でたのしい学校生活なんて送れなかったよ。だから俺はおかげで、好きなことさせてもらってるよ。でも、だからって深雪にそんなプレッシャー与えなくても、また後で考えれば良いだけの話だろ。このままじゃ、とてもじゃないけど深雪が可哀想だ」

深雪「お兄ちゃん……」

亮「（佐和に）勉強させて、良い高校に入らせることが深雪の幸せだと思ったら大間違いだぞ。深雪の気持ちも、よく考えてくれよ。親なんだから」

と、階段を上っていく。
深雪「ちょっと、お兄ちゃん……」
と、慌てて後を追っていく。
宣彦「何だ、あの態度は」
佐和「亮も、内心気にしてるのかもしれない
わよ、深雪のこと」
宣彦「あいつが何を言おうと、ここは閉めん。
いつかは、亮か深雪のどちらに継がせるッ」

25　藤原家・亮の部屋
亮と深雪が話している。
亮「深雪、お前は本当にこのままで良いの
か？」
深雪「……」
亮「ここを継いで、お前はそれで満足なの
か？　今だって、ずっと受験勉強ばっかり
してるけど、ここを継ぐつもりで進学校に
受験するつもりだったら、やめとけよ。何
も今すぐ将来のこと考えなくても良いん
だから」

深雪「私は良いの。どこかで働くより、家で働いてたほうが良いし」
亮「好きなことしたいんだったら、すれば良いんだぞ。どうせ、いつかはここの事務所だってなくなるんだから」
深雪「そんな言い方ないでしょ。お父さんだってお母さんだって、サボってるわけじゃないんだから」
亮「俺は、好きなこともできないまま、この会計事務所を継がなきゃいけない深雪が可哀想だから言うんだぞ」
深雪「お兄ちゃん……」
亮「本当に好きなことをして生きろ。人生一回しかないんだから」
深雪「……」
亮「それと、もし高校の第一志望に落ちても、全然気にすることないからな。第二志望の高校に入れば良いんだから」
深雪「お兄ちゃん……」
亮「俺、第一志望は受からなかったけど、そ

れはそれで良かったと思ってる。第一志望に落ちたから、今の楽しい学校生活が送れてるんだから。そりゃ、第一志望受かってたら、また違う生活があったのかもしれないけど、人の運命って分からないもんなんだよ」

深雪「……」

亮「（笑って見せて）もし落ちても、悲観する必要なんてないんだよ。落ちたら、それが自分の運命なんだなって思えば良いだけなんだから」

深雪「自分の運命か……」

亮「なるようにしかならないんだから、どんなに勉強したって」

深雪「開き直らないでよ」

笑い合う亮と深雪。

26　山岸家・居間（翌朝）

利枝子、友子、あやめが朝食を食べている。

友子「ねえ、利枝子」
利枝子「何？」
友子「再来週から二人とも夏休みでしょ。その最初の週なんだけど、一週間留守にするけど、留守番できる？」
利枝子「どっか出かけるの？」
友子「うん。高校時代の友達と、一週間旅行しようって話になったの。みんな、利枝子たちと年の変わらない子どもがいるんだけど、一週間ぐらいの留守番なら大丈夫だろうって思ったんだけど」
利枝子「私は良いけど、あやめはどうするの。まさか、私が面倒見るの？」
友子「当たり前でしょ。姉妹なんだから」
利枝子「マジ……？」
あやめ「……」
友子「そんな嫌な顔しないの。姉妹でしょ」
うんざりした顔の利枝子――寂しい顔のあやめ。

27　中央高校・全景

28　同・二年Ａ組教室

利枝子が登校してくる。

利枝子「おはようッ」

談笑していた春樹、亜沙美、剛士、奈々、見迎えて、

春樹たち「おはようッ」

利枝子「亮君は、まだみたいだね」

亜沙美「また遅刻じゃないかな」

春樹「明日からテストなのに……。今は通常授業だからまだ良いけど、テスト当日に遅刻はさすがにねぇ……」

と、亮が登校してくる。

亮「おはよう」

春樹「おはよう。（と亮を見ると）どうしたの、その怪我……」

亮、口の絆創膏を指して、

亮「ああ、これか。昨日、父親と喧嘩しちゃってさ」

剛士「殴られるなんて、余程のことがあったんだな」
亮「まあな（と苦笑する）」
春樹「穏やかじゃないね。親子喧嘩で殴られるなんて……」
亮「ああ」
春樹「家族のことで悩むっていうのは、やっぱりどこも一緒なんだね」
奈々「一体何したの？　お父さんに殴られるなんて、よっぽど怒らしたんでしょ」
亮「俺はただ、全然仕事の来ない会計事務所なんて、やめたほうがマシだって言ったんだよ」
剛士「それは殴られるよ。どんな会社だって、亮君の親は一生懸命仕事してるんだから。それをそんな風に言ったら、殴られるのも無理ないわ」
亮「俺は、深雪のことも考えて言ったんだよ。したいことも出来ずに、あんな事務所継ぐようなことになったら、深雪が可哀想だろ」

亜沙美「私一人っ子だから、こんな妹思いのお兄ちゃんがいるのが羨ましいよ」
春樹「兄弟っていうのはね、どこも仲の良い兄弟だけとは限らないんだよ。中には、ひどく仲の悪い兄弟だっているんだから」
亮「春樹ッ」
春樹「（ブスッとして）……」
奈々「妹を思って殴られたってわけか……。それもなんだかかっこ良いね」
剛士「俺にはとても真似できないな」
利枝子「（呟くように）妹を思ってか……」

29　同・新聞部室

春樹が、印刷機の前に立っており、印刷したポスターを整理している。
と、ドアが開き、亮がやってくる。
亮「春樹」
振り返る春樹。
春樹「どうしたの？」
亮「図書室でテスト勉強やってたんだけど、

何だか疲れちゃって。気分転換に、春樹の顔見に来た」
春樹「気分転換に見に来るって、俺はお花畑じゃないんだからさ」
亮「それもそうか」
春樹「もうすぐだもんね、テストは。けど、無理はしないようにね」
亮「同じ言葉、そっくりそのまま返す」
春樹「……？」
亮「春樹だって無理してないか？　学校祭のポスターの準備して、バイトもして、家のこともやって。しかも、すぐ期末テストも入っちゃうし……。今に身体壊すんじゃないかって心配になってるんだぞ」
春樹「ありがとう、心配してくれて」
亮「春樹は、クラスには欠かせない人なんだよ。体調不良で休みでもしたら、何だか悲しくなるだろ」
春樹「そう言ってくれるだけで、元気もらった気がする」

亮「何か手伝おうか？」
春樹「あ、もう大丈夫。ちょうど印刷終わったところだから」
亮「そっか」
春樹、携帯電話を見て、
春樹「もうちょっとで六時か。今日は、そろそろ帰ろうかな」
亮「あのさ、春樹。ちょっとお願いがあるんだけど」
春樹「何？」
亮「テスト勉強付き合ってくれないか？」
春樹「良いよ、俺もバイトやり始めてから、テスト勉強する暇なかったら、そろそろやろうと思ってたの」

30　アパート・谷島家・居間

春樹と亮が入ってくる。
春樹「さあ、どうぞ」
亮「あれ、倫子は？」
春樹「倫子、俺の暮らしぶり心配してか、自

分も働くって言い出して、今日面接に行ってるの。俺は、そんなつもりで倫子を引き取ったわけじゃないのにさ……」

亮「倫子だって、それぐらい分かってると思うぞ。でも、このまま居候したくないんだろう。それに、春樹を助けたい気持ちもあるかもしれないな」

春樹「そうだね」

亮「さて、春樹にいろいろ教えてもらうか。もう、全然勉強できないから」

春樹「体育以外だったら、なんでも教えてあげる」

亮「春樹、体育だけは悪いもんな」

春樹「そう。昔っから、体育だけは好きになれなかった。その代わり、普通の科目はできてた。そういう身体になってるんだよ（と笑う）」

亮「よし、じゃあ早速春樹先生に教えてもらいますか」

春樹「ＯＫッ！」

と、玄関の鍵が開き、旅行用鞄を持った夏希が帰宅する。

夏希「ただいま」

春樹「（睨みつけて）……」

亮「（夏希に）お邪魔してます」

夏希「いらっしゃい。（と春樹に袋を渡して）お土産買ってきたよ」

春樹「（皮肉に）二週間も旅行できるなんて、呑気なもんだね。こっちが、どんな生活送ってるのかも考えないで……」

夏希「……」

亮「春樹……？」

夏希「私のこと、不満に思ってるの？」

春樹「不満しかないよッ。これから、どうやって暮らしていけば良いのか考えなきゃいけないのに……」

夏希「その辺は心配することないの。私の稼ぎで何とかなるから」

春樹「姉ちゃんの稼ぎなんか、当てにしたくもない」

夏希「キャバクラで働くことがそんなに嫌なの？」
春樹「嫌に決まってるでしょッ。アフターとかなんとかって言って、金持ってる男と店外デートするようなところで働いてる姉ちゃんなんかの稼ぎで食べさせてもらったって、何にも嬉しくない。そういうお店で、姉ちゃんが一緒にワイワイ楽しく働いて遊んでることが許せないのッ」
夏希「……」
亮「……」
春樹「何がお土産だよ。こんなもの、いらないよッ」
と、袋を投げ捨てる。
亮「春樹……」
春樹「（夏希に）出てって……顔も見たくない」
夏希「……」
春樹「俺と姉ちゃんは違うんだ。いくらだって、住むところはあるでしょ。ビジネスホ

テルに泊まる余裕だってあるだろうし、客の男のところにでも泊まったら良いでしょ。もう、姉弟の縁切るからねッ」

夏希「……」

亮「春樹、そこまで言わなくても……。たった一人の家族なんだぞ。縁切ったら、お前は一人になるんだぞ、それでも良いのか」

春樹「俺には、倫子っていう家族がいるんだ。何も姉ちゃん一人じゃないんだから……」

夏希、無言のまま荷物を持って去っていく。

亮「ちょっと、お姉さん……」

春樹「亮君、ほっとけば良いの、あんな人……」

亮「けど……」

春樹、頭を抱えて、

春樹「もう、どうしてこんなことになったんだろ……」

亮「……？」

春樹「女を武器にして稼いだお金で、養って

もらいたくないっていう、俺の意思、間違ってる……？」

亮「じゃあ、利枝子はどうなんだよ。あいつだって、家はスナックじゃないか」

春樹「それはまあ……そうかもしれないけど……」

亮「姉ひとり弟ひとりの暮らしをしている春樹なら、そういうお金の事情に敏感になる気持ちも分からなくはない。春樹は、女を武器にして、楽にお金を稼いでいるって思うかもしれないけど、お金を稼ぐことって、案外大変なんだぞ。春樹だって、喫茶店のバイトしてるんだから、それぐらい分かるだろ」

春樹「分かってるよ。だからこそ、地道にコツコツとやっていきたいんだよ。その気持ちを、姉ちゃんだって分かってるはずなのに、何のあてつけでキャバクラなんか……」

亮「お姉さんだって、本当はキャバクラで働きたくはないんじゃないのか？　お客さ

んの言うことを聞けば、もらえるものがもらえるんだ。お姉さん、自分を犠牲にしてでも、春樹を養いたいっていう責任があるんじゃないのか」

春樹「綺麗事だよ、そんなこと……」

亮「まあ、家族の問題だから、俺はあまり深くは関わらない。お姉さんの稼ぎのことが気に入らなくて、それで春樹が悩んでるんだったら、俺で良ければいくらでも話聞いたのに」

春樹「亮君……」

亮「聡実が自分を守ってくれる和哉のことを好きになったのは、よく分かる。未婚の母になった真由子をみんなで守ることもよく分かる。それに、同じ養護施設で家族と思って一緒に育ってきた倫子のことを春樹が守ってやりたい気持ちは、これはすごく当然なんだよ。でもさ、その春樹は誰が守って、助けてあげるんだよ」

春樹「……」

亮「俺だよ。利枝子だよ。みんなだよ。みんなが、春樹のことを守ってやるし、助けてやるから」
春樹「亮君……」
亮「さ、どんどん勉強教えてくれ。今日は、勉強スイッチがオンになってるからさ」
春樹「（笑顔になって）うん……」

31　藤原家・亮の部屋（夜）

亮、入る――鞄を置くと、ベッドに横たわる。
と、佐和が入ってくる。
佐和「こんな時間まで何してたの？　もうすぐ期末テストでしょ。それなのに、よくそんな呑気でいられるね。少しは緊張感ってものを持ちなさいよ」
亮「分かってるよ、うるさいな。今日、春樹の家で思いっきりテスト勉強したんだ。あと少し復習すれば大丈夫なんだから、余計な心配するなよな。俺の心配する暇があっ

たら、父さんの心配なり、深雪の心配したらどうだ。俺のことなんて、もうどうだって良いんだろう？」

不機嫌なまま、ドアを閉めて去っていく佐和。

と、入れ違いに深雪が入ってくる。

深雪「あんな言い方しなくったって。私だって、たまには気楽にやりたいんだから。あんな風に言ったら、またお母さん、私の部屋に来るじゃない。一人で勉強してるほうが集中できるのに」

亮「悪かったな。何か、言われるたびに腹が立ってさ」

深雪「お兄ちゃん…」

不機嫌なままの亮。

32　山岸家・居間（夜）

友子が、棚の上に飾られている家族写真を見つめている――何か思い悩んでいるような険しい顔である。

33　宮田家・居間（夜）

真実のおむつを替えている真由子。

34　アパート・谷島家・居間（朝）

朝食を食べている春樹と倫子。

倫子「じゃあ、今日はテスト終わったら、すぐ帰ってくるんだ」

春樹「うん」

倫子「お昼、焼うどんで良い？」

春樹「うん。倫子の料理だったら、何でも大丈夫」

倫子「分かった。帰るとき、連絡して」

春樹「はいよ」

倫子「あ、そういえば、バイトのことなんだけどさ」

春樹「面接どうだった？」

倫子「ダメだった……」

春樹「そっか」

倫子「なるべく、早く探すから」

春樹「良いよ、そんな無理に急がなくても」
倫子「でも……」
春樹「今は、充電期間だと思って、ゆっくりしてれば良いんだよ。あんな男の犠牲に遭って……」
倫子「……」
春樹「あれから、何か連絡あった？」
倫子「ううん。離婚届受理したら、もうそれっきり」
春樹「分かりやすいね。法的にも夫婦じゃなくなったら、そのままプッツリなんて」
倫子「けど、私はこれで良かったと思ってる。何だか、解放されたみたいな感じがしてさ」
春樹「倫子がそう思ったのなら、それで良いよ。これからは、新しい倫子としての生活を始めれば良いんだから」
倫子「うん」
春樹「（時計を見て）あ、もうこんな時間。そろそろ出なきゃ」

35　中央高校・昇降口（数日後）

春樹と亮が登校してくる。

春樹「いよいよ今日だね」

亮「ああ。今回こそは、一教科も赤点採らないようにしないと。あれだけ勉強したんだから」

春樹「今回は、大丈夫だと思う。亮君、真剣に勉強する姿勢になってたから」

亮「そうか。春樹にそう言ってもらえて、何だか張り合いが出てきたよ」

春樹「その気持ちを持って頑張って」

と、利枝子も登校してくる。

利枝子「おはよう」

春樹と亮「おはよう」

利枝子「期末テストが終われば、一学期なんて終わったも同然。この三日間、乗り切るよ。これが終われば、夏休みは、もうすぐそこなんだから」

春樹「気合い入ってるじゃん。」

利枝子「だって、二年生の夏休みが一番充実

できるんだよ。三年生になったら、就職試験とか大学の準備が始まるんだもん。だから、今回赤点さえ採らなければ、夏休みの補習もないんだもん」

春樹「確かにそれは言えてる」

亮「よし、最後の復習するぞ」

と、小走りで去っていく。

春樹「ちょっと、亮君」

利枝子「今回の亮君は本気だね」

春樹「結構勉強してたからね、今回」

利枝子「私たちも負けてられないね」

春樹「だね」

笑いあう春樹と利枝子。

つづく